

## 23. 古代尺説と住居学に於ける Standardization について

広島大教育工学 ○加藤 泰

1. 住居学の内容は自然科学社会科学芸術科学の各に主としてよるべき方面を具備すべきことは自分の主張で、これは昨年自分が本学会に生活学を根拠付けるもの

は自分が弁証法美学として美を生活芸術表現の三概念間  
に關係付けるべしとしたものを概要報告したもの（文書  
発表に止まったが、この問題については「理想」和辻哲  
学特別号参照）による時当然なる結果である。この内容  
の社会科学方面研究に属する重要な一方面として人身の  
寸法に基づく建築空間の Standardization の問題が有  
るが、自分の言う古代尺（世界的な）は人身に基づく尺  
度であるので、この尺度はこの Standardization に使  
う単位として最も適当なものとして使われたと言ってよ  
いと思う。本発表に於いて具体的に住居その他の如何なる  
建築割として使われているかを明らかにしたい。

2. 方法としては古代尺説によるがこの尺度で建築割  
のみならず条里条坊割の基本も解決して従来専門家の説  
を多く訂正するに至っているし、その後「古代尺大要」  
の発表で説の概観をしているのでよられたい。

3. これは日本住宅の柱間、畳の規格性を生んで、日  
本建築空間区画を非常にすっきり且つ経済的にさせ、  
Gropius の日本古建築礼讃の理論的根拠となっていると  
思う。よって民家史の系統論や間取りの説を民家研究の  
本流によって正すことが出来るし、その他古代尺による  
地割建築割の従来言及しなかったものに及べる。